

## 2018 年度 入学試験問題

# 国 語

## (第 3 回)

[注意]

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図があったら、解答用紙を取り出して受験番号と氏名を記入し、QRコードシールをはりなさい。
3. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
4. 問題冊子の余白等は自由に使って構いません。
5. 試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

東京都市大学附属中学校



【注意】国語の問題では、字数制限のあるものは、特別な指示がない限り句読点等も一字に数えます。

1 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ゲームを楽しむためにある「ルール」が果たす A は、三つに分けることが可能です。

一つは「空間・時間・人数・形式」などの物理的な条件に関する「公平さ」と「共通化」です。全員がスポーツについて共通の理解をしておかなければ、一緒に楽しく遊べませんから。

第二に「暴力を抑制すること」です。暴力的では楽しく遊べませんからね。

以上の二つに収まらない項目を集めて、「その他」という二番目のグループを作ると、このグループが妙なものの集まりであることに気がきます。ここに収まっている各条項は、何のためにあるのだろう、と分析すると、何と（！）得点や勝利することを「難しくする」ためにあることが分かります。そして、どうもこの「やりにくい条件」を作り出すことがルールの重要な機能なのです。

サッカーはなぜ手が使えないのでしょうか？ ラグビーはなぜボールを前に投げてはいけないのでしょうか？ バasketは、なぜダブルドリブルを禁じているのでしょうか？ そこには、理由らしい理由などありません。これらは、単に「得点するのを面倒くさくする」以外に存在する理由はないのです。

なぜでしょうか？ 実は、答えは意外に簡単。最初に確認したように、ルールは「楽しんでプレー」するためのものだから、「簡単にすることが、楽しむために必要」だからなのです。これがスポーツの基本的な考え方です。ちよつと不思議な感じがするでしょう。

「ボールを前に投げることはOK」にしてしまうとラグビーは楽しくない、と思った人たちが集まって、それを「反則」にすると合意したのです。 ※ オフサイドがなければ、サッカーの魅力は

<sup>a</sup>ハンゲンすると思つた人たちが、同じくそれを「禁止」として合意したのです。これらのルールに記された具体的な条項には、X「X」を判断したうえで、競技の参加者によって検討した結果、皆で合意したという歴史的な背景があるのです。そこを理解しておくことは、スポーツを理解するうえで最も重要なポイントです。

何しろ、こういった背景はルールの中に文章として書かれていませんので、それ自体はルールではありません。ア、プレーする人は事前に理解しておく必要があります。書かれていないけれど、前提になっていること、それがB「B」というものです。

例えば、商売をする人が契約をする場合、契約する当事者どうしには、そもそも「契約は守るもの」という原則が事前に了解されていなければ契約をしても意味がありません。「嘘をつくなんてことは法律には書いてありませんが、いけないことだ」ということは皆が知っています。こんなことは大人に言うべきことではなく、子どもの時に「しつけて」おくべきです。同様に、「ルールは守る」という原則のうえに、「ルール」は成立しているのです。原則というのは、簡単に言え

ば、いちいち言う必要がない「当たり前のこと」なのです。

「イ」、「勝つために努力せよ」とはルールに書かれていませんが、勝とうと努力しないのであれば、スポーツは無意味です。「勝とうと思わない相手」と対戦したら、全然おもしろくないはずです。「勝つために努力する」のは、事前に合意された「原則」なのです。

整理すると、スポーツをプレーする人は、(ルールに書かれているように)「暴力を振るわないで、わざわざ面倒なことを守らなければならない」ことを事前に了解したうえでプレーをすることが前提になっているのです。

実際にプレーすると分かるでしょうが、この書かれていない「原則」を守るということは、簡単なようで実は難しい。相当な覚悟が必要で、

「ウ」、「勝とうと努力する」ことより、数倍の覚悟が必要だと思います。なにしろ勝つために「所懸命プレーいっしょけんめいしている」と、カッとすることが頻繁ばんぱんにあるはずで、熱中すればそんなことは、むしろ当たり前です。この「当たり前」のことをしないためには、それなりの覚悟がいるはずで、

「エ」、逆に、それができる人は尊敬に値します。① スポーツマンが尊敬されるのは、そういう理由があるからです。これは、放っておいたらできません。サッカーで相手選手のユニフォームを掴つかんだほうがディフェンスはしやすいでしょう。でも、やってはいけません。ラグビーなら「ボールを前には投げない覚悟」がどうしても必要なのです。★

スポーツをする以上、「ルール」に書いてある具体的な条項を守るとは当然ですが、それだけではスポーツマンと名乗ることはできません。「ルール」が何故なぜ必要かという原則を理解して、その原則を守る覚悟を持たないならば、本当はスポーツをしてはいけません。してもいいけど、それはあまり意味がありません。ルールは楽しむためにあるのですから、ルールを守って楽しくないならスポーツをやめる意味はありません。スポーツに参加するかどうかは、あくまで本人の自由意思ですが、参加して楽しむもうとするなら、それなりの覚悟が必要だということです。

こうした原則を守る覚悟のことを「Y」と呼びます。この視点に立つて選手宣誓せんせいを言い換かえますと、「我々は、スポーツの本質を理解し、そのうえでスポーツを楽しむために、スポーツの原則を守る覚悟を持ち、ルールに従って、セイセイドウドウと戦たたかうことを誓ちかいます」となります。これが正解。

皆さんのなかで「自分はスポーツマンだ」と思う人はいますか？

Yesの人は、「なぜ自分がスポーツマンだと考えているのでしょうか？」

「スポーツをよくするから」「スポーツが好きだから」「スポーツが得意だから」。それらは、<sup>②</sup> はつきり言って不正解！ 全てスポーツに関する理解の浅さから、あるいは「ゴカイ」<sup>c</sup> から出てくる答えです。スポーツが、<sup>①</sup> 得意、<sup>②</sup> よくする、<sup>③</sup> 好きだ、の三つはスポーツマンの条件ではあ

りません。ここまで読んだ人は、その理由が何となく分かっているはずです。

欧米では、スポーツマンは尊重されますが、スポーツが好きなおうべいは、それだけで尊重に  
C することなのでしょう。確かに、日本でも何となく「スポーツマンは良い奴だ」と思  
われています。しかし、残念ながら、その判断には明確な理由がありません。そこで、まずスポー  
ツとは何かを理解し、そしてスポーツマンの本質について理解してもらおうことにしましょう。

スポーツを定義すると、「身体を使って、勝敗を競う、ゲーム形式の運動」です。その第一の目  
的は、「楽しむ」ことです。勝敗を競うことは、楽しむためには重要です。そして、プレーするう  
えで「ルール」と「相手」と「審判」を尊重することがスポーツの原則です。なぜなら、この三  
つこそが「スポーツを構成する一番基本的な要素」だからです。スポーツをする人は、この三つ  
について、それぞれの価値を理解しておかなければなりません。そうでないと、どんなに足が速  
くても、ヘディングがうまくても、バッティングが上手でも、それだけではスポーツと呼ぶに  
C しないのです。

「尊重」とは、自分とは異なる他の人を理解し、その価値を認めることです。ですから、ある程  
度の心の余裕がなければできません。そして「尊重」することには、一定の訓練（トレーニング）  
が必要です。「尊重」を理解しない者はスポーツマンの名に C しません。

例えば「いじめ」の問題。「私と違うこと」が「いじめ」の最初に存在します。ですから「いじ  
め」は「尊重」の反対にあるものであり、スポーツにとっては倒すべき テキです。「いじめ」に  
加担する人にはスポーツをする資格がありません。

スポーツにおける尊重というのは、「ゲーム」を尊重することです。具体的には「ルール」  
「相手」「審判」という、スポーツが成立するには絶対に必要な存在が尊重する対象になります。  
これらは、時には自分とは対立する立場の存在にもなりますが、それにもかかわらず、その存在  
や価値を認める、 O 尊重することが絶対に必要です。スポーツを通して、まず「尊重する」と  
いうのは、どういうことか「を」を理解してください。

繰り返しになりますが、ルールでは、ボールを手で運んだ方が楽なのに「足だけを使え」（サッ  
カー）とし、「前には投げるな」（ラグビー）となっています。こういった面倒なルールさえなけ  
れば、もっと楽に点がとれるはずですが、そこには勝利のためにはどうしても越えなくてはなら  
ない「困難な状況」「余分な条件」が記されています。それがルールなのです。スポーツに参加す  
るということは、こうした合意された「わざわざ用意された面倒で困難な条件」を了解したうえ  
で、あえてチャレンジするという「覚悟」を問われるのです。この覚悟こそがスポーツマンシッ  
プの中核に存在しているのです。

※オフサイド……競技者がプレーしてはいけない位置にありながらプレーする反則。

問1 ——線 a↘d のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 本文冒頭↘2 ページ★印までにはあやまったことばを使ったために文意のとおらない部分  
が一つあります。そのことばをぬき出し、文意がとおるよう正しいことばに置きかえなさい。  
ただし、どちらも★印までの範囲から漢字二字でぬき出すものとします。

問3 空らん  ・  にあてはまることばをそれぞれ文中からぬき出しなさい。

問4 空らん  ↘  にあてはまることばとして最もふさわしいものを次から一つずつ選  
び、それぞれ番号で答えなさい。

- 1 つまり
- 2 だから
- 3 しかし
- 4 例えば
- 5 恐らく

問5 空らん  にあてはまることばとして最もふさわしいものを次から一つ選び、  
番号で答えなさい。

- 1 何が安全なのか
- 2 何がおもしろいのか
- 3 何が得点に結びつukのか
- 4 何が当たり前なのか

問6 空らん  にあてはまることばを文中から九字でぬき出しなさい。

問7 空らん  にはすべて同じことばが入ります。そのことばを文意がとおるよう、ひらが  
な三字で答えなさい。

問8 ——線①「スポーツマンが尊敬される」とありますが、それはどのような理由からですか。  
最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 勝つために絶えずきびしい練習に取り組むことで、結果を出すことにつながられるから。
- 2 勝つことを最大の目的とするために、冷静さを失うことなくプレーに熱中できるから。
- 3 勝つために最大限の努力をするなかで、ルールを守ろうという高い意識を持っているか  
ら。
- 4 勝つために面倒なルールをよく理解する一方で、難しいプレーをこなすことができるか  
ら。



(問題は次のページに続く)



2 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

主人公の三郷心は、北九州工業高校の二年生。祖父が経営する三郷金属工業という町工場で職人のものづくりを見ながら育ったが、工場の閉鎖や祖父の死などが重なり、高校入学後はそれをさけるようにコンピューターにうちこんでいた。その後、ふとしたきっかけで「ものづくり研究部へもの研」に入学することになった心は、一年上級の原口、同級生の亀井、吉田とともに旋盤という工作機械の部門で「高校生ものづくりコンテストへものコン」への出場を目指している。なお「隅肉」「テーパ加工」「バイト」などは旋盤に関する専門用語である。

四月。冷たさを残した空気にまぶしい光がはねる春。心は高校二年生に進級した。へもの研」に入学して半年、へものコン」の練習を始めて、五か月がたった。途中、指のけがで一週間ほど実地から離れたが、心配したほどの後れはなかった。

その後は春休みもアで練習を重ね、なんとかひととおりの切削ができるようになった。これからコンテストまでの二か月半、徹底的な練習で完成度を上げていく。

工作物の外周を削る外周削り、平たく仕上げる端面削り、そこから続けて難所の隅肉、ネジ切り、そしてテーパ加工。

作業工程や手順を覚え、すべての形は取れるようになった。数値もなんとか公差の範囲に収まるが多くなった。

① というところで、中原先生が厳しくなった。

「三郷、面が汚いぞ。なんでか」

大きな声が工場に響いた。丁寧にやっているつもりでも、表面のなめらかさに欠けている。

原口や亀井の部品に比べると、そのちがいはイ」としている。

「送りの速度が悪いせいです」

心は答える。

「わかつとるやないか」

これまで先生は、心が課題部分の形をきちんとつくれるようになることに重きを置いており、その指導を原口に任せてきた。もっと先をつくりたいと願う心を制し、それがさらに心のあせりをかき立てた時期もあった。

けれどこれが先生のやり方だったのだろう。まずは基礎基本。正確さ。見た目の美しさは、正確なものをつくれないうちは意味がない。

そして今、心の目の前には美しさの壁が立ちはだかっていた。どうしたら美しい切削面に仕上がるのか、頭ではわかっている。切削中、一定の速度を保つことが必要だ。途中で速度が変わってしまうと、表面に細かな溝ができ、ぎざぎざになってしまう。また速度の調節も難しい。微妙すぎるのだ。機械によっては薄い紙を差し込んで細かく調節することもあるほどだ。

硬い金属を加工する工作機械は、その大胆なパワーとはウに、非常に繊細な技術で支えら



れている、技術の習得が進むほど、心はそれを強く実感していた。工作物の取りつけ具合、バイトの角度、回転速度を選ぶ感覚とその調節。それらのほんのわずかなブレが工作物にストレートに反映する。工作物は嘘をつかないうえに、鋭く厳しい。ほんのちよつとのブレも忠実に形に現してしまう。作業中、少しでも機械が動くとき表面に細かな溝ができ、バイトの当て方がわずかにずれていただけで、中心部分に砂粒ほどの削り残しが突起として残る。

「測定器もセンサーも自分の体の中に入れる」

いつか原口からも教わった。つまり、体に覚えさせるということだけれど、それは②一朝一夕に身につくものではない。

「感覚をつかんでうまいこと合わせろ。そしてきれいに、なおかつきつちりした数値を出せ。女子らしい繊細な感性でつくり上げろ」

中原先生は言った。矛盾していることを言っていると、わかっているのだろうか。微妙な感覚ときつちりとした数値。しかも女子ときた。特に最後のフリーズが、心の混乱を大きくする。

心は③抗議をこめた視線を返したが、すでに先生は吉田のくりくり頭をなでていた。

(中略)

ゴールデンウィークを間近に控えた四月の終わり、部活のミーティングで三つのことが伝えられた。

「毎年のことやけど、連休の間も練習はあります」

「はい」

だれもが真顔でうなずいた。今は一本でも多くの課題部品をつくりたい時期だ。反復練習、反復練習。練習を重ねて、体に課題の感覚を覚え込ませておきたい。

「ついでには五月の連休に特別講師に来てもらうことになった」

「小松さん帰ってきたんですか？」

「いや」

声を上げる心に、先生は小さく首を振って言った。

「本校の卒業生、さきはらゆきこさんだ」

崎原、由希子？

どこかできたことがある。

名前をきいただけなのに、心の頭の中でなぜか漢字に変換された。もしかして。

顔を上げた心に、「そうだ」というように先生はうなずき、

「本校の卒業生。〈ものコン〉の全国三位入賞者よ。大手機械メーカーに就職して、今は〈技能五輪〉の強化選手としてがんばってる」

一度しか見ていないはずの笑顔が、くつきりと思い出された。初めて見た時、心はあの笑顔に抵抗を覚えた。旋盤に対して複雑な思いがあったからだ。工場を造り、壊した。懐かしいけれど、つらい。好きだけれど、嫌い。旋盤は心にどうしようもない。④二律背反をつきつけてくる。それにもまっすぐに組み組むことのできる崎原さんの笑顔を、ちゃんと見ることができなかった。

「ごちゃごちゃと引つかかる思い出を忘れたくて、コンピュータの世界を選んだつもりだった。ほら、この人よ」

先生は持っていたファイルの中から、見覚えのある新聞のコピーを取り出した。課題部品を手にした崎原由希子さん。

「こんな人でしたっけ」  
⑤その笑顔から受ける印象があまりにちがうことに、心は少しうろたえた。

あの時うざつたいとさえ感じた笑顔は、そこにはなかった。はにかむような控えめな微笑み。けれど、はちきれんばかりにちかちかと輝いている。

この笑顔の裏側にあるものが、心には今ならわかる。毎日の地味な積み重ね。真夏はさらさらと滴る汗をぬぐいながら、冬は凍えるほど冷たい指先にたえながらの練習。

膨大な時間を費やして練習をしても、体に残るものはほんのわずかだ。やっつけられないほど効率が悪かった。けれどわずかながらも確かに身につくものがある。だから続けられる。

未熟ながら、テーパもネジもつくれるようになった。隅肉もなんとかやれる。崎原さんの笑顔に隠れているのも、たぶんそういう自信だと思う。もっと練習すれば、もう少しうまくなれるんじゃないか。そういう期待。たぶん。

まだまだ全然追いつけないけれど、崎原さんの体の中にあるものを、自分も少しはつかんでいると心は思う。だからこんなに崎原さんの笑顔がまぶしく見えるのだろう。

「それから」  
中原先生は声を引き締めた。

⑥「校内選考は、例年どおり六月初めだ。中間テスト明けでもあるけど、あわせてがんばってくれ。すつと冷ややかな空気が流れた。校内選考。選ばれるのはひとり。か、ふたり。下腹にぐっと力が入った。自分でも意外なほどの思いが込み上げてきた。ひとりは原口に決まっているにしても、もうひと枠可能性が残っている。

出たい。  
混じりけのない、ただまっすぐな思いだった。突然、途方もないような道が目の前に開けたみたいになる。

地区大会、九州大会、全国大会。意味なんか知らない。とにかく行けるところまで行ってみたい。見えているところには行ってみたい。それだけだ。ストレートな思いが、つき上げるように心の胸に湧いてきた。

数時間後、心の胸に芽生えたまっすぐな思いは思わぬ力にゆがんでしまうことになる。その日の練習を終え、工場の鍵を職員室に返しに行った時だった。

「二年三組、三郷心入ります」

大きな声で挨拶をして入ると、中からぬつとなじみのない顔が出てきた。首からネームプレートを下げていて、自動車科教諭 宮田雅治と書いてある。心は会釈をした。

「おお、きみが三郷心くんか」

学科がちがうと接点はほとんどないが、相手は心を知っているらしかった。

「はい」

うなずくと、宮田先生はほくほくと笑って、

「へものコンン<>に出るんやろ。がんばれよ」

心の肩をどーんとたたいた。

「まだ決まったわけじゃな……」

言いかけた言葉を宮田先生は意味不明な言葉でさえぎった。

「決まったも同然よ。せっかく女子が旋盤やっとなるんやから」

「え？」

つながりがよくわからなくて、心は瞬きをした。

「女子が旋盤やるなんて珍しいけんね。それだけで新聞やらテレビやらも来るやろう。そしたら学校のPRにもなるやんね。そういう役割も背負っとなるんやから、きみにはがんばってもらわんと。自動車整備のほうも女子がおるとよかったんやけどね」

それだけ言うと宮田先生は、ぼかんとする心の脇をすり抜けて職員室を出ていった。

⑦ さらさらとした気持ち悪さが広がって、心は胸を押さえた。

(まはら三桃『鉄のしぶきがはねる』より)

問1 空らん ア ウ に入ることばを、次の漢字を組み合わせて二字の熟語にして答えなさい。

消 上 整 然 反 腹 返 目 裏 歴

問2 —— 線①「中原先生が厳しくなった」とありますが、中原先生はなぜ今までより厳しくなつたと考えられますか。その理由として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 心がひととおりの作業をこなせるようになったところで、作業の正確さに欠けていることに気づき、基本に返る大切さを教えようとしたから。
- 2 心が技術の習得に自信をつけているのを見かね、ほかの部員の工作物とくらべさせることで、もう一度自分の技術を見つめさせたかったから。
- 3 心が正しい数値を出せるようになったのを見て、美しいでさえこそが重要であることを伝え、さらなる技術の向上を目指させたかったから。
- 4 心が工作物の正確さを身につけつつあることを見きわめ、より高度な段階に到達させるため、仕上りの完成度をも求めるようになったから。

問3 —— 線②「一朝一夕」とありますが、これと反対の意味をあらわすことばを文中から五字以内でぬき出しなさい。

問4 —— 線③「抗議をこめた視線」とありますが、心はなぜ「抗議」を示しているのですか。その理由として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 中原先生の言い分が、理屈りくつに合わない内容だったから。
- 2 中原先生の話し方が、にえきらないようすだったから。
- 3 中原先生の言葉が、差別的な意地悪だと気づいたから。
- 4 中原先生の要求が、女子には無理なものに思えたから。

問5 —— 線④「二律背反」とありますが、このような状態を具体的にあらわしている表現がほかの場面にも見られます。その表現を（中略）以前から十五字でぬき出しなさい。

問6 —— 線⑤ 「その笑顔から受ける印象があまりにちがう」とありますが、心の崎原由希さんの笑顔に対する印象は、どのようなものからどのようなものに変化しましたか。以前の印象と現在の印象を説明したものととして最もふさわしいものを次から一つずつ選び、それぞれ番号で答えなさい。

- 1 男子中心の世界の中でがんばっている無理した笑顔という印象。
- 2 何のなやみもなく好きなことに取り組んでいる笑顔という印象。
- 3 自信に満ちあふれ技の高さをひけらかすような笑顔という印象。
- 4 内心に未熟さを持ちながらそれをかくすような笑顔という印象。
- 5 づらい練習の中でつかんだ手応えを内にひめた笑顔という印象。
- 6 自分への大きな期待の裏に不安がかくれている笑顔という印象。

問7 —— 線⑥ 「ずっと冷やかな空気が流れた」とありますが、この「冷やかな空気」はどのような気持ちであらわしたのですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 いくら努力しても代表に選ばれる人数が限られていることに対するあきらめ。
- 2 自分こそが代表に選ばれるのはまちがいないと確信してうたがわない冷静さ。
- 3 もしかすると技術以外の選考基準も考慮されるかもしれないといううたがいがい。
- 4 お互いが競い合って代表を勝ち取らなければならないことを自覚した緊張感。

問8 —— 線⑦ 「ざらざらとした気持ち悪さ」とありますが、どのような気持ちだと考えられますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 男子の中に混じって地道に練習を重ねてきたものの、コンテストに出場できるかどうか内心は不安だっただけに、学校の立場からも出場できる可能性が高いのではないかという宮田先生の発言に、肩すかしを食わされたようにあつけにとられた。
- 2 長い時間をかけて努力してきた成果を試すため、純粋にコンテストに出場したいという決意を新たにしていて、存在のめずらしさにもみ価値をおくような宮田先生の心ない発言により、その思いに水をかけられたばかりか不快感を覚えた。
- 3 ものづくりに対する屈折した思いから解放され、コンテスト出場という明確な目標をようやく持てるようになったのに、学校のPRという他人の都合から応援しようという宮田先生の態度に、はらわたがにくりかえるようにふゆかいになった。
- 4 技術を向上させたいという純粋な気持ちでコンテストに出場する機会をねらっていたところ、自分が女子であることが代表に選ばれるうえで有利にはたらくという意外な情報をもたらされ、背に腹は代えられないながらも居心地の悪さを感じた。



(問題は次のページに続く)



3 次の詩を読んで、後の問いに答えなさい。

ジョギングの唄

川崎 洋

おれは常套句じょうとうくを愛する  
すなわち

① <自分の歩幅ほはばで>

というやつだ

② および腰こしの知性ちせいなぞ

古い運動靴うんどうぐつのように打ち捨てて

わっしよい

人は

よりよい明日をつくり得る

と

③ 意地いぢでも思いこんで

わっしよい

心臓しんざうから押し出された血が

ふたたび心臓しんざうにもどるのに

18秒じゅうはちびょうしか かからぬそうな

寸刻すんこくごとに

新しいのだぞおれは

わっしよい

おれの生き方は

こうなのだ

こうなのだ

こうなのだ

と確かめながら

いとしい地球ちきゅうを踏ふんで行くのだ

わっしよい

〔『中学生に贈りたい心の詩40』より〕



- 問1 ——線①「自分の歩幅で」とありますが、このことは作者のどのような見方につながる  
と考えられますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。
- 1 合理性の危機
  - 2 画一性の否定
  - 3 共同性の衰退
  - 4 多様性の排除

- 問2 ——線②「および腰の知性」とありますが、これはどのようなものだと考えられますか。  
最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 すぐにくじけてしまうようなもろい精神
- 2 自らを傷つけてしまうような繊細な感性
- 3 かんたんに手に入るような浅はかな知識
- 4 誰も見向きもしない古くさいだけの常識

- 問3 ——線③「意地でも思いこんで」とありますが、これは「おれ」のどのような思いをあら  
わそうとしていますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。
- 1 科学技術による人類の発展を何の疑いもなく信じている、という思い。
  - 2 自分たちの将来に関してはつきりした不安を感じている、という思い。
  - 3 人は絶えず向上していけるのだと自らに言い聞かせよう、という思い。
  - 4 自分の考えに対してたくさんの人々からの同意を得たい、という思い。

- 問4 この詩の表現についての説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えな  
さい。
- 1 倒置やリフレインを多用することによって、リズムカルな詩になっている。
  - 2 比喩的な表現によって、生きていくことの喜びや苦しみが強調されている。
  - 3 省略や対句を用いることによって、余韻を残しつつ力強い詩になっている。
  - 4 くり返される感動詞によって、強く前向きな気持ち的印象づけられている。

問5 この詩についての説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 ジョギングで身体をきたえることで、将来、社会のために尽くす人間になろうという「おれ」から皆への呼びかけが述べられている。

2 ジョギングする「おれ」の姿を通して、一つのことのうちこむ事こそが世の中にとって重要であるということを訴えようとしている。

3 ジョギングをするように、確かな信念に基づいて自分のペースで一步一步着実に成長していこうとする「おれ」の姿が描かれている。

4 自分自身の生き方を模索する「おれ」がジョギングと出会い、走ることで生きがいや喜びを感じるようになったことを表現している。

(問題は次のページに続く)



4 次の各問いに答えなさい。

問1 次の各文の——線について、敬語の用い方が正しい場合は○を、あやまっている場合は正しい表現を、それぞれ解答らん(と)に記しなさい。ただし、文の意味は変わらないようにするこ

- ① 先生がお話したことをノートにまとめる。
- ② お客様、ご購入の商品はどちらにいたしますか。
- ③ まもなく、係の者が扉をお閉めいたします。
- ④ 集合場所への行き方は案内所でおたずねください。
- ⑤ 今日、先生はいつでも教室に参られますか。

問2 次のA～Eを数える時と同じ単位をつけて数えることばの組み合わせを後から一つずつ選び、それぞれ番号で答えなさい。

- |   |          |   |      |   |    |   |     |   |        |
|---|----------|---|------|---|----|---|-----|---|--------|
| A | テント      | B | ざるそば | C | 羊羹 | D | ウサギ | E | エレベーター |
| 1 | ピラミッド・鳥居 |   |      |   |    |   |     |   |        |
| 2 | 弓・ちようちん  |   |      |   |    |   |     |   |        |
| 3 | 鏡・校庭     |   |      |   |    |   |     |   |        |
| 4 | たんす・のぼり旗 |   |      |   |    |   |     |   |        |
| 5 | 船・イカ     |   |      |   |    |   |     |   |        |
| 6 | 白鳥・コウモリ  |   |      |   |    |   |     |   |        |
| 7 | 黒板・屋根    |   |      |   |    |   |     |   |        |